

淡青

「淡青」について
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

刊行のごあいさつ

21世紀がまさに目前に迫ってきました。社会の変化のスピードがさらに速まり、地球がますます狭くなるなかで、情報もつ重要性は加速化され、その量だけでなく質の向上も求められています。このようなときに、本学も多くの皆様に読んでいただく広報誌の刊行にこぎつけることができました。

現在はまた、大学の存在が今までになく社会から注目されている時代といつて良いでしょう。私たちが私たちに学外の方々を知っていただきたいという願望、そして学外の方々が私たちに向ける関心、その双方を満たす媒体としてこの広報誌を位置づけたいと思っています。その先にあるのは、双方のインターフェースの構築でしょう。

創刊号では、卒業生であり文部大臣、外務政務次官を歴任された町村信孝さんと蓮實重彦総長との対談、そして特集として『東大生のいま、むかし』を取り上げました。「教育・研究の現場から」「世界の中の東京大学」「サイエンスへの招待」は本学が行っている教育研究の紹介のページ、「キャンパス散歩」と「インフォメーション」は本学に親しんでいただくためのページです。

今後、年に2号のペースで刊行する予定です。皆様のあたたかいご支援と、忌憚のないご意見をいただきながら、本学と社会とのインターフェースの発展に貢献できるよう本誌を育てていきたいと考えています。

(東京大学広報委員長 大塚柳太郎)

総長対談

ゲスト

町村信孝

外務政務次官(前文部大臣)

対談当時(一九九九年七月一四日)

中と外から

どうすれば日本の大学が今もっている力をもっと有効に発揮できるのか。
町村信孝外務政務次官(前文部大臣)をお迎えして、東大、そして教育問題について熱く語っていただく。

みづめる



町村信孝

Nobutaka Machinura

一九六九年、東京大学経済学部卒業。
同年通商産業省に入省し、ニューヨーク日本貿易振興会(JETRO)出向など、多彩な活躍をする。一九八三年から衆議院議員。一九九七年、文部大臣。一九九八年〜一九九九年一〇月、外務政務次官。



蓮實重彦

Shigehiko Hosumi

一九六六年、東京大学文学部卒業。
大学院人文科学研究科に進むとともに、留学したパリ大学から一九六五年にPhDを授与される。帰国後、立教大学を経て一九七一年から本学教養学部、一九九三年、教養学部長。一九九五年、東京大学副学長。一九九七年、東京大学総長。

総長対談 中と外からみつめる

蓮實 東大で広報誌を出すことになりました。その第一回に、町村外務政務次官に卒業生としてご登場願ったというわけです。理由はいくつかあるのですが、まず、今年は一九六九年の三十二年目にあっています。一月一日と二月一日……
町村 「団交」ですね(笑)。

蓮實 そこで活躍になりまして、ご卒業後は官界に進まれ、その後、アメリカに行かれ、政界に進まれ文部大臣はじめ多くのポストについてこられました。この三年を、日本の歩みとか東大の歩み、それからご自身の歩みとも重ね合わせて、うかがえればと思います。

町村 この創刊号に、あまたいらっしやる卒業生

の中からご指名を受けたことを心から感謝いたしますし、光栄に存じております。

今のお話ですが、私が大学に入ったのは六三年です。ところが、産経新聞のスカラシップを受けて留学でき、公務員試験を受けるというので卒業が少し遅れ、六九年には二四歳でした。

前年の春ごろから大学紛争の動きが医学部を中心にありました。夏ごろに、経済学部もご多分に漏れずにストライキに入ったわけです。私は全共闘でも民青でもない学生諸君と議論しながら、自分たちが大学を変える努力をする必要があるだろうと、一月ごろ自分たちでストライキ実行委員会書記局というものをつくって、全共闘の諸君か

ら自治会を取り返し、二月月ほどストライキのリダーをやりました。

一二月に東大入試が中止になるという話が流れて、もしストライキが大学入試の阻害要因になっているのなら自ら解除しようとして、二月末にストライキは解除しました。きちんと区切りをつけなければいけないということで、加藤一郎総長代行と話し合いをする中で、確認書をつくらう、それには皆の前でということ、秩父宮ラグビー場で行ったわけです。私は七学部全体の議長という名前を勝手につけていました。

ある種の閉塞感というのでしょうか、当時の大学が本当にこれでいいんだろうか、十年一日のごとく、黄色くなった表紙のノートを全言筆記させるといふ講義さえあったわけです。私はアメリカの大学に三年のときに留学したので、その比較も自分の頭の中でしていたのです。

蓮實 私はちょうどそのころフランスでの四年間の留学から帰ってきたところで、まず立教大学に就職しまして、七〇年から東京大学にまいりました。私もこの大学はもっと良くなるはずなのに、機能が十分に発揮されていないということを非常に強く感じておりました。

卒業後は、通産省に入られましたね。
町村 経済を多少かじって、日本経済の発展に少しでも役立つには役所かなと単純に思い、通産省にいったわけです。海外に行くかどうかでも自分の国を意識せざるを得ないわけで、実は留学したときに政府で働くことと思ったのです。

私はもう一度勤務でアメリカに行つて、ニューヨークのJETROで働いたとき、子供たちは普通のアメリカの公立学校に入れました。すると、日本の学校と違って、子供たちが生き生きと学校に行く。日本ではややもすると苦しみに行くみたいな感じがあったので、どうしてこんなに違うんだらうかと思つたわけです。
自分自身の大学での経験、子供たちの小中学校



1999年7月14日、懐徳館にて

中は三割は女性にしよう、ということをやりました。

蓮實 ちょうど町村文部大臣のときに諮問が出まして、私は途中から大学審議会の委員になったんですが、一年間に九九回集まり、答申が出ました。それを読みますと、優秀な検討チームをつくれれば三人で三週間できる内容なんです。それを忙しい方々が九九回も集まり、最終答申案を前にして言句をまだ変えている審議会で、私は皆さんはマゾだと申しあげたんです。

町村 政治の反省を含めていうと、意思決定に時間がかかりすぎるのは、まったくそのとおりです。昔は、重要法案は一国会一本と言われてきました。今は三本も四本も通してけしからんとマスコミのみなさんがご批判されるのは、世の中の変化のスピードがわかっておられないのではないのでしょうか。役所もそうです。

蓮實 東大は、意思決定は早いんです。総長補佐体制というのがありまして、学部と複数の研究所からおいでいただいて、毎週月曜日に二時間ほど会議をしています。問題は、そこに出てくださる方が、今いちばん輝いておられる研究者だということです。その方々が一年に三十数回集まり、ワーキンググループをつくって審議する。それを評議会で通す。だから一部の反対で評議会が空転することはまずありません。必要なプロセスは踏むべきですが、日本では時間をかけることが誠意の表れと思われすぎていますね。

町村 東大はそうやって効率的にやっておられるのだからうけれども、私はいくつかの大学を拝見しましたが、評議会で物事が決まらずに、学部の教授会に全部持ち帰って、極端にいえばすべての先生方がOKと言わなければ批准できないという仕組みでしょう。今度、評議会と学部教授会の権能を明確に分けるという法律改正が通りましたが、本当は法律改正をしなくても、学内の運用でいかようにでもできるはずだと、内部でずいぶん

言ったんです。

蓮實 今の日本で危険なのは、制度を変えようと考えるだろうという思想です。現制度でうまく運用すれば良くなるはずなのに、意識が変わらないのでそれにながらにだめなされている。大学には知性があるはずだから、もう少し柔軟に対処しなければいけないはずなんです。

町村 私が大臣のときに、学生の成果の評価という話がありました。成績評価をきちんとやりましょうということですが、こんなのは法律ではなく、まさに一人ひとりの先生方の意識の問題です。ただ、一生懸命に採点をする、あの先生は厳しいからゼミも受けなさいということ、次の学期に学生が来なくなる。やはり悪質は良質を駆逐してしまうんでしょか。

蓮實 日本では大学は研究者の集まりだという意識が強すぎますが、まず教育者の集まりでなければいけないと私は思っています。もちろん研究は当然ですが、世界的にすぐれていても、教育の第一歩をご存じない方が多い。声が聞こえなくてもよい、学生が騒いでいても気にしないというようなことがあって、結局はだれも聞いていないということになるのです。

町村 私がアメリカで留学したのは、ニューヨークランドにある小さい、比較的歴史の古い大学でした。一年生向けに一人くらの教室もありました。大部分は最初から小人数の教室でした。たいへん違うと思ったのは、本郷では先生の全言筆記ということさせられることが多かったのですが、そんな授業はまったくない。テーマをばんと与えて、その場ですぐにディスカッション。それをひととおりやってから、これこれの本を明後日までに読んでくるようにと、猛烈に本を読ませる。要するに、自分の頭でものを考えさせることを訓練しているんです。

日本の教育は小さいときから、考えるよりは計算の技術であるとか問題の解き方を習い憶える

での経験から、日本の教育をなんとか改めようと思いました。政治家になれば、少しはそういうことに自分で取り組めるかもしれない、そんな思いもありまして、一三年間の通産省勤務を辞めて政治家になり、真っ先に文教委員会に希望して入ったんです。

その後、文部政務次官を平成元年から一年やり、その後幸いなことに文部大臣を仰せつかったものですから、なんとか自分が大臣のときに教育改革に一定の道筋はつけたと思います。家庭教育に始まって大学、大学院、研究教育といったものについて、たとえば中央教育審議会、大学審議会といった審議会に答申を出してもらうなど精力的に取り組みました。

変革の視点

蓮實 はからずも六九年から今日まで、教育にかかわっていただきまして、大学の歩みのほうが遅々として進まないという印象を、おそろくおもちだと思えます。私は六九年の精神が大学を変えざるまで二年かかったと思うのです。変化のきざしが八九年ごろから出てきて、たとえば教養学部の改革とかですね。なぜ二年かかったかということ、年齢構成のような気がします。

町村 そのころの学生や院生の方々が、そろそろ教授になられたということですか。

蓮實 日本社会の年齢構成がもう少し自由である、ことによるともっと早かったかもしれないという気がします。今おっしゃった、審議会の年齢構成も問題だと思えます。大学審などにださせていただいても、六歳を過ぎている私がいちばん若いのではだめだと思っております。

町村 おっしゃるとおりですね。そもそも、何でもかんでも審議会にかけるといのはおかしい。それとも一つ、女性が少ないことです。政府の目標は二割を女性にするといふんです。私の在任

という面が強くなります。教育だからそういう部分が必要なのはわかるんですが、大学に至るまで、とにかく憶えさせることに偏した教育ではないのかなと思うのです。たぶん明治以来の、追いつき追い越せに必要な手段だったのでしょうか。

蓮實 教授の言葉の全言筆記は論外ですが、大教室の授業をマスプロ教育と呼んで悪者扱いするのは反対でして、教師たるものは一時間半なり二時間半、大教室で学生を引きつける能力がなければいけないと思っています。フランスでも、それができる先生とできない先生がありまして、できれば学生がいなくなるから消えてしまふ。ですから、そのための努力を先生方は大変やっておられます。その雄弁術を日本人は若干甘く見ているところがあるのではないのでしょうか。一時間半の大教室の授業ができない人は、教師として失格でしょう。それと同時に、それをカバーするような小人数の授業とが二本立てになっているといいと思います。

町村 国際会議に行く、日本人はスリープ、スマイル、サイレンスの三Sというのですか、とにかくだめだというわけです。私もいま外務政務次官として国際会議などに出ると、英語のハンディキャップのあるなしは別にして、やっぱり彼らはうまいですね。彼らは日本語でしゃべっても、きくと上手だろと思うんですが、われわれは下手なんです。きくと訓練の足りなさ、意識の足りなさなんだろうと思います。

蓮實 東大に留学生センターというものがあって、そこで一学期が終わった後に、それぞれの国の代表の人にほぼ一分ほど話してもらっています。アジアの人、ヨーロッパの人、います。これが日本人の学生の発表よりもはるかにうまい。まず、おもしろいことを言う。人を引きつける。笑わせる。これは一度外部の方にも見てもらおうと思っています。

国際舞台で

蓮實 いま外務政務次官としていろいろな会議に出ておられますが、次官という呼び方は英語ではバイス・ミニスターですか。

町村 最近では変えまして、バイス・ミニスターは事務次官で、政務次官はステイツ・セクレタリーと訳します。ちょっと妙な英語ですけど、ステイツ・セクレタリー・フォー・フォーリン・アフェアーズという言い方になっています。

蓮實 私はバイス・ミニスターとうかがっていたのですが、町村次官は、日本で初めてバイス・ミニスターの名にふさわしい活躍をしておられるとうかがいました。ぜひいろいろな会議にお出になるわけでしょう。

町村 そうですね。この七月上旬に、国連事務総長が主催するソボ問題の関係外務大臣会合に出て、事務総長が冒頭発言した後、真つ先に手をあげて発言したので、代理のくせに大きな顔をしているという顔をされました。その後、人口と開発に関する国連特別総会で七分だけ英語でスピーチをしてまいりましたが、国連本部のあの会議場で演説するのは気分がいいものですね（笑）。

蓮實 私どももいろいろな外国の会議に行きまして、あいさつその他を英語、フランス語等やらせていただくわけですが、私は英語は映画だけで覚えたのです。六五年までのアメリカ映画は、悪い言葉を使つてはいけないことになっていましたので、八〇パーセントはわかりました。それ以後はスラングも使つていいということになりましたが、私は幸いなことにアメリカ映画を五、六、六十年代に見ておりました。

私は高校のときに英語をやめてフランス語を習い、入試もフランス語で受けたんですが、それでも英語で話をするに通じるし聞いていただけのアメリカ映画のおかげです。私の場合は、自分ではまったく意識していないのですが、英語がフ

レはけしからんといつてやめたのですが、東大はアジアでは一位だということがこのところずつとつづいております。ほかにもランキングはありますが、私は数値によるランキングではなく、全世界の大学の五から一〇パーセントに入っていればいいと思っています。そこに入っているかどうか、重要なことだと思います。

それから、外国でPRなりを取つてこられた先生方が今たくさんおられますから、そういう方々に、あなたは東大を何流だと思われませんかと補佐会の席で聞いたことがあります。すると、頭をかしげながら、一・二流というお答えが返つてきました。一流ではなくて一・二流というわけです。それではその〇・二は何かとうかがうと、まず第一に施設の問題。

町村 施設というのは、前文部大臣としては頭が痛いな。

蓮實 第二に補助職員の問題。向こうで数人の補助職員を使つていた方がこちらに帰ってくるんだれもない状況になってしまふ。ですから研究室の立ち上げにも数年かかるようで、それがつらいというお話なのです。

施設に關してもう少し国民に理解していただきたいのと、補助職員をどうやって大学の中にキープするかです。今までどおりの公務員体制だけでは無理だと思つたのです。外注するなり何なりですが、そのためのお金をどう頂戴できるかということになります。

町村 職員については、定員削減というのが全庁一律でかかってくるから、皺がそういつところに寄つてしまふんでしよう。この問題は私も先生方からずいぶん聞いております。たとえば科研費の中で人件費を出してもいいのでしょうか。

蓮實 はい、ある程度までは。ところが、理系の方々は朝から晩まで実験をされますので、その中で非常勤を雇つと一カ月は何時間とか決まつてお

りまして、ここが非常にむずかしい。

ランチ・アクセントなのだそうですね。そんなことで、世界の学長の皆さんの中で有名になってしまいました（笑）。

話をするのは、もちろん内容も重要なのですが、どこかで引きつけないと、いい内容の話をしても聞いてくれませんか。

町村 おっしゃるとおりです。たまたま私は一月に、カリフォルニア大学バークレー校で、大学院の学生さんと日本に關心のある教授の方々が三名ほど集まつた場でしゃべつた後、Q&Aを英語でやつたんです。質問がおもしろいんですね。非常にストレートですし、しかもアメリカ人ばかりではなくて、留学中の韓国人とかフランス人からまつたく予想外の質問が飛んできたりして、往生しましたけれど、たいへんおもしろかったです。

もう一つ感心したのは、その前に三日間、アジアとアメリカの人が一名ほど集まって議論する、アジア太平洋フォーラムに出たときのことで、それはスタンフォード大学が主催しています。後でスタンフォードの先生に、どういふ目的かと聞くと、そこでの議論以上に、アジアの人たちにアメリカに關心をもつてもらふ、よく知つてもらふ、言つたらばアメリカのPRの国策協力みたいなことを言つておられたので、偉いものだとつくづく感じました。

エズラ・ボージェル教授が、ハーバード大学も年に何度もそういう集まりをやつておつていまして、四年前に、六日間のハーバード主催のセミナーに参加したんですが、超有名教授が一五分ぐらいしゃべつて、その後一時間はその先生と議論ということで、非常に味わいのある、刺激的なお話を聞きました。それも何かというと、アジアの人たちを集めて、要はアメリカのPRということなんです。

蓮實 日本はそれをやらなさすぎますし、また大学でやるうとしても、費用の点とか、面倒なことがいろいろありましてね。でも、私は来年から攻

町村 やや飛躍することをおつたかもしれませんが、だから独立行政法人が、という議論があるんですね。そういうところまで文部省の、あるいは人事院の、あるいは大蔵省の一律の査定がからない自由度がもてるならば、独立行政法人のほうがいいじゃないかという声もあるだろうと思つた。ただ、後は財源はどうするかという話ですね。

蓮實 独立行政法人化問題は、通則法とか国家公務員型とかいろいろ出しておりますが、私は二世紀に向けて国立、私立にこだわらず日本の高等教育全体を根本的に考え直すため、高等教育評議會のようなものが必要とされていると思つた。予算の流れにしても、今後どこに投資しなければいけないかというところを、全体をみて考えていただく場がないんですね。

町村 それは確かに一つの基本的な欠陥かもしれないですね。

蓮實 どうすれば日本の大学が今もつていける力をもつと有効に發揮できるか。これは大学が考えなければいけないことなのですが、それが政治の場に反映する組織がないんです。

町村 何か新しい場をつくらないといけないのかもしれません。

ただ幸いなことに、かなりの国会議員さんたちが、日本の学術研究、科学技術振興は二一世紀の日本の鍵を握ると、お題目のように言います。そして、いかに今の大学の施設その他、研究投資が抑えられてきたかということについての認識は、かなり広範に共有されていますから、どう具体的に予算化していくかということですね。

蓮實 政治家としての次官にお願いなのですが、日本の大学がいいことをしたら、世界に向けて表明していただきたい。東大の宇宙線研究所の発見も、クリントンが先に言つてしまつた。

町村 カミオカンデですね。

蓮實 カミオカンデはクリントンが先に言つてし

めていこうと思つています。日本に來られる外国人はたくさんおられますが、いまは東京大学のサイエンスとテクノロジを印象づけるイヴェントをアメリカでしたほうがいいと思つて、実行に移すつもりです。

いろいろうかがつておられますと、世界的な水準でノーベル賞をもらつてもおかしくない方が日本には二〇人ぐらいいます。しかし、高い水準での競争は、傑出した方は別ですけど、強烈に売り込むか、け落とさないかと賞に届かない。

そんなさもしい目的とは別に、ごく単純に東大を世界に売り出すための催しを積極的にやつてみようと思つたのです。一回目は来年、アメリカの東海岸で計画しております。日本の大学にどうぞおいでくださいということをしなないといけないと思つた。いい仕事をしたうえで、科学およびテクノロジのマネー・ジメントをする人がいないとだめだと思つたんです。

町村 多くの国で、ノーベル賞をとる努力を国をあげて組織的にやつている。諸外国のこの現状は、まさにサイエンスをマネー・ジメントしているんですね。

蓮實 そのマネー・ジメントを日本はどこもやりませんで、文系の私が終わらないなりに始めたんです。私は科学のマネー・ジメントはわかりませんが、マネー・ジメント一般ならば若干わかります。そうした視点からすると、今の状況では、突出した人が一年に一回以外には、ノーベル賞はもつまわつてこないと思つた。

飛躍に向けて

町村 先ほど素晴らしい方がたくさんいらつたやうなところでしたが、いろいろな分野で、日本、あるいは東京大学は国際水準でどんなところに位置しているのでしょうか。

蓮實 アジアに変なランキングがありまして、こ

まつたので、アメリカ人の大半は日本の研究と思つていない。そういうものを首相にあげるようなバイパスがないのです。

日本の大学は間違いないトップでございますが、それについては大学自身も発信しておりますけれども、政治家の方々に世界に向けて表明していただくありがたいと思つたのです。その代わり、いろいろお叱りもありませんから、それをうかがうとしまして。

町村 次官がここにおいでになられたころの東大とは、まったく比較にならないほど良くなつていると私は思つております。

町村 三、四年間でずつと良くなつていると、総長が自信をもつておっしゃるわけだから、私どもも自信をもつて世界に、あるいは国内の方々に言えることはたいへんうれしいことです。

蓮實 いろいろありがとうございます。

町村 どういたしまして、ありがとうございます。

(一九九九年七月一四日、懷徳館にて)



蓮實重彦総長は、本年二月二十七日に、芸術・文化分野における最高の勲章とされるフランス芸術・文化勲章(Ordre des Arts et des Lettres)の中でも最も栄誉ある「コマンダール」(Commandeur)勲章を授章されました。

カトリーヌ・トラウトマン(Catherine Trautmann)フランス共和国文化・通信大臣と、授章式典の後で談笑する総長。